

生命内に満ちて  
何気なきもの。

一つの存在

あるがまゝ、のもの

その姿、千変万化

しかも皆

充実している。

我 汝を見ている

か、ずに静かに汝を見ている。

汝 ますます円くなり

美しくなり

力満ちて

線 益々面白くなる

馬鈴薯

我 汝を愛す。

(詩集「欣喜」より)

このように実篤は、内から溢れ出て来るいきいきした生命力や、それぞれの個性をしっかりと見抜いていたのです。

### 三 自然が美を愛する

美しいものを愛してやまなかった実篤の、考え方をよく現している詩がここにあります。

#### 自然の目

美を愛するものは人間だけではない。

自然もまた美を愛する。

それなら自然に目があるのか。

ある。自然の目は人間の目である。人間の目を通して自然は自分の美しさを見たがっている。そうとでも言わないと、この花の美しさの証明は出来ない。

(「新しき村」昭和12年4月号より)

この詩を味わうと、人間も自然の一部であり、人間の中に自然が生きている。そして、目に見えない大きな自然の意志で美しいものが生み出されている、という実篤の考えがよくわかります。

### 四 遺稿「二つの南瓜」

実篤が、昭和二三年以来、信頼する人々と共に刊行して来た雑誌「心」の昭和五一年七月号は、同年四月に亡くなった実篤の追悼号でした。その追悼号のおしまいのページに、「二つの南瓜」という実篤の遺稿(生前に発表されなかった詩文)が載っています。

自然の美しさを愛した実篤にふさわしい遺稿だと思われれます。少々長いので、ここには一部分を抜き出してみましょう。

八十二歳

実篤



和而不同 昭和41年

#### 和而不同

僕は画をかく。かきたいからかく。たのまれたからかくのではなく、かきたいからかく。

(略)

ともかく君達(南瓜)は美しい。何処が美しいか私は知らない。だが君達は美しい。しっかりしている。色が美しい。形が美しい。それ以上おちついていてる。

(略)

二つのすました顔、おちついた顔。

(略)

君達二人のすました形、両方がしっかと坐って黙っている。両方がすまして黙っている。お互いすまして、黙って坐っている。それがいいのだ。

そのすました、沈黙の姿のよき。

(略)



八十六歳

実篤

山茶花 昭和46年

# もっと知りたい 武者小路実篤

## 自然を愛する情熱

武者小路実篤は、山や海、草や木、あらゆる自然に対して愛情のこもった目をそそぎ、その奥深い美しさを鋭く感じとる人でした。そして、あるがままの自然から、いきいきとした生命力を感じ取り、力強く生きる元気と、こつこつ働く勇気とを受け取って、自分自身の暮らしに生かしたのでした。

註 昭和44年

### 一 馬鹿一という男

実篤は晩年、「馬鹿一」という男が登場する小説や戯曲をいくつも書きました。



主人公は下山一という名前なので、毎日、道ばたの草や石ころを、売れもしないのに描いているので、皆が「馬鹿一」と呼んだのです。

の馬鹿一を自分の分身(自分の性質や考え方と似た一面を持っている人)だと言います。

その馬鹿一は、自分の絵を軽蔑する者に向かってこう言うのでした。

「君は(野の草や石を)あきる程見たことがあるのか、見ない前にあきているのじやないか。よく見たことがないから、同じに見えて其処に千変万化がある、面白さがわからないのだ。よく自然を見ない奴に限って、自然を馬鹿にする。見あきることが出来るのは、下らない人間のつくったもので、自然のつくったものではない」(小説「馬鹿一」より)

この言葉などは、まさに、馬鹿一の口を通して実篤その人が言っている言葉ですね。

### 二 自然を見る実篤の目

自然の色の美しさ、形のみごとさ…。実篤は勿論そういうものに感動します。しかし、実篤の心に響くものは、それだけではありません。次の詩を味わってみましょう。

#### 馬鈴薯讃

馬鈴薯よ 馬鈴薯よ  
汝(お前) 土中であつてがんばる者よ。

大地の滋味を集めて  
がんばる者よ。

汝は見られん為にあるにあらず  
生きんが為にある也。

生きぬけ

汝の花は美しけれども  
その方では汝に優る者多し  
汝の果実に至っては

我は思ひ出すことさえ出来ず  
だが汝の根こそ  
美しく滋味に富む也。

汝は大地の子  
大地の内に子をふやすもの。

我は汝によって  
画をかく呼吸を教わりぬ。



馬鈴薯と玉葱 昭和15～25年

(うらへ)